

テクニカルデレゲートの任務

平成 27 年 4 月 1 日実施版

(公財)日本ハンドボール協会競技運営部

この任務は、日本ハンドボール協会（以下本協会という。）主催、共催大会、加盟団体の主催、共催大会の全試合に適用する。ただし、大会により 2 名のテクニカルデレゲート（以下、TD という。）を配置することができない場合は、主催者の役員を 1 名配置し、記録席のもう一方の係員が TD の任務を遂行する。大会中の各試合の全責任は競技委員長にあるが、TD は競技委員長のもと、競技役員として試合に立ち会い、試合を円滑に運営するために、レフェリー、タイムキーパー、スコアラー、その他の競技役員、補助員と協力して担当試合を管理する責任者である。

平成 26 年度全国高等学校選抜大会において、ラインクロスの違反があったシュートを得点と記録した不適切な事例が発生した。その結果、その試合は得点修正がなされないまま終了し、翌々日になって同点延長戦の再試合となる不手際となった。さらに、この判断が遅れることとなったことから、決勝戦の途中で中止となる異常な状態を引き起こした。得点に絡むミスが大きな事態を引き起こしたことは TD としての責任は重大であることを再確認しなければならない。改めて TD の任務を確認し、適切な競技運営がなされることが求められる。

任命された TD は、最新の競技規則書、競技規則書必携、大会開催マニュアル、ストップウォッチ、及び笛を持って試合に臨まなければならない。ほとんどの事項は競技規則書、競技規則必携、大会開催マニュアルに記されている。

以下に、一般的な TD の任務の流れを記した。原則として、すべての事項を把握しておかななければならない。TD に代わってできる事項は、記録席員、あるいは、競技役員、委員に対応させてもよい。これらの判断は TD がする。

用語の使い方として、TD が直接行動しなくても良い事項を、「管理」すると表現した。ただし、各試合のすべての事項の責任は、TD にある。

TD は 1 名がタイムキーパー、1 名がスコアラーの責務を負う。その他の業務は、2 名同格、同責任である。試合開始までの準備を的確に遂行すれば、交代地域規定を遵守させることが最大の任務となる。特に、交代地域における選手、チーム役員のスポーツマンシップに反する行為の管理は、TD の責務である。

1 TD の果たす役割

- 1-1 レフェリー、他の競技役員、補助員と協力し、円滑なゲーム管理を行う。
- 1-2 判定上の問題が生じたとき、適切な助言・勧告を行う。
- 1-3 タイムキーパーの時計の管理、交代地域規定の管理をす



る。

- 1-4 公式記録用紙の**管理・照合**を行う。
- 1-5 試合中止の判断はレフェリーおよび TD にあるが、**続行のために適切な助言・勧告**を行う。
- 1-6 交代地域違反についての管理、運用は TD の最大の任務である。
- 1-7 **事実判定を除いた異議申立てについては、真摯に対応し、適切に判断する。必要があれば競技委員長、大会委員長と協議し、適切な競技運営の責任を負う。**

2 TD の配置

- 2-1 各試合に責任者として TD を配置する。記録席（現在、国際ハンドボール連盟（以下 IHF という。）ではジャッジズテーブルと呼ぶ。以前の IHF テキストではタイムキーパーテーブルとなっていた。）の両サイドに TD をそれぞれ 1 名、タイムキーパー、スコアラーを配置する。IHF マニュアルで



は、記録席は 5 名で運営されるが、本協会は最大 5 名が座れるスペースを確保する。アジアハンドボール連盟（以下 AHF という。）主催大会は、AHF から派遣された TD2 名、本協会が指名するタイムキーパー、スコアラー、補助役員の 4～5 名で運営される。

TD の服装は、写真のように TD として統一したスポーツウェアを着用することが望ましい。最近の IHF の大会では、記録席の右端に連盟主催者としての代表オフィシャル、その横に IHF の TD（IHF のタイムキーパー責任者）、逆の端に IHF の TD（スコアキーパー責任者）が座っている。中央にいる 2 名は、開催地の補助役員である。

- 2-2 全国大会だけでなく、地区大会でも TD を配置する。競技の種別に限らず、記録席の両端に座る役員を TD とし、タイムキーパー、スコアラーとともに試合の運営にあたる。TD としての資格制度の早期導入を検討しており、**平成 27 年度**も全国で TD の講習会を開催する。講習会参加者を中心に、有資格者として取り扱うことを検討している。TD は、競技規則の熟知には常に努力をするべきである。

- 2-3 TD は、競技委員長のもと、競技役員として各試合に立ち会い、各試合を円滑に運営するため、レフェリー、TD、全ての競技役員、補助員と協力して、当該の試合を管理する責任者である。

- 2-4 各試合に、TD を配置する。各試合の記録席に TD2 名、タイムキーパー、スコアラーを配置する。コートからみて左側に位置する TD はタイムキーパーの業務を管理する。右側に位置する TD はスコアラーの業務を管理する。



両 TD は交代選手の不正交代、不正出場を管理する。また、交代地域の管理をする。

- 2-5 IHF 大会は、コートからみて左にから IHF 役員、2 番目に IHF タイムキーパー担当 TD、主管協会のタイムキーパー、主管協会のスコアラー、右が IHF スコアラー担当 TD

を配置している。日本協会は記録席の両サイドに TD をおく。

2-6 競技中の通信機器の利用を積極的に推進する。審判に2名とTD1名の3台1セットが最小単位である。余裕があればもう一人のTDにも使用する配慮が求められる。最新のIHFの世界選手権大会ではさらにマッチスーパーバイザー1名の5台1セットで運用している。



2-7 通信の内容は競技運営上の各種の情報提供が主である。通信機器は公的な電波を利用することから、短時間の交信で、的確に行う。通信の内容は事実判定に関する指摘は避けなければならない。TDはレフェリーの死角でおこった失格相当の違反に対して助言することができる。

2-8 本協会競技委員長、本協会審判長は競技運営を円滑に推進するため、また、レフェリー育成のため、記録席または別の場所から通信機器を用い、レフェリーに各種のアドバイスをすることができる。

3 審判会議

3-1 大会のTDに指名された役員は、情報収集を含めて各種決定事項に対し、レフェリーと共に共通理解を得るために出席する。

4 代表者会議

4-1 その大会のTDに指名された役員は、当該大会の代表者会議に出席する。各種決定事項に対し、参加選手、チーム役員、レフェリーと共に共通理解を得る。

4-2 各チームは、その大会に出場する選手、参加するチーム役員の登録証を持参し、競技委員会が確認する。

4-3 各チームは、その大会で着用するすべての種類のユニホームを持参し、競技委員会が確認する。

4-4 選手変更は代表者会議開始前までに届け出る。届出書に理由は明記するが、理由は問わないので、証明書の提出は必要ない。国体は日本体育協会の規定通り従来通りとし、国体要項に従う。

5 試合開始前

写真のように、IHF大会では、記録席後方は大会役員のサポート席となる。正面左席が



ら主管国協会役員、2席～6席IHF役員、7席～12席PCゲーム分析班、13席補助

アナウンサー、14席アナウンサー席となっている。

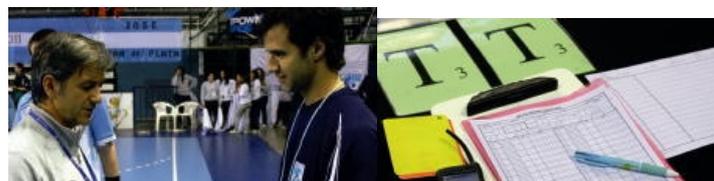
右のイラストのように、記録席はサイドラインから 50cm 離し、ベンチは 1m 離してセッティングする。

5-1 各大会、各試合は、平成 27 年度本協会競技規則及び最新の競技規則によって行う。

5-2 試合開始前に会場、コート、ゴール、ゴールネット、キャッチネット、ボール、交代地域のスペース、ベンチの長さ、ベンチの数、記録席関係備品等の有無、放送設備、医務関係の準備状況を管理し、各種機器の動作具合の点検を管理する。また、その他全般的な事項を管理する。ベンチはチーム役員、選手全員が座ることのできるロングベンチが望ましい。



(参考) 試合開始までの TD の役割として、IHF マニュアルは下記の通り。



90 分前 会場に到着



75 分前 各用具の確認 (ゴール、キャッチネット、記録席、役員サポート席、公式電光掲示板)

60 分前 各用具及び記録席用具の確認 (卓上時計、ストップウォッチ、イエロー・レッドカード、笛、グリーンカード 2 セット、予備の退場者表示カード、チーム役員カード、試合関係用具、メンバー表の受理)



40 分前 チーム役員カード、グリーンカードをチーム責任者 (A) に渡す

30 分前 チーム役員に選手、チーム役員のユニホームを確認する



11 分前 試合開始のための通常のセレモニー開始

2 分前 両チームの交代地域後方の用具の確認

5-3 競技会場は、正規コートを使用する。競技規則に定められた通りとするが、教育機関の大会など特別な場合、正規コートを使用できないと定めたときは、その規則に従う。交代地域にコーチングゾーンを設定する。特にラインで区画しないが、センターラインから 3.5m の位置 (ベンチの記録席先端) を始点として、ベンチの終端までをいう。コーチングゾーンで各種の指示をするために、1 名が立つことが許される。

5-4 大会使用球は、本協会、もしくは IHF の検定球を使用する。ボールの外周、重さは

競技規則通りとする。空気圧の数値は各試合の前に、TD、レフェリー、チーム役員の協議によって決定する。適正なボールの機能が発揮できる空気圧とする。

5-5 本協会の大会で使用するユニフォームは、2種類以上用意することとする。IHF は2種類としている。1種類は明るい色、もう1種類は濃い色とする。その他の種類の色は任意とする。競技本部として、白一色のユニホームを用意することを推奨する。



ゴールキーパーの色は上記2種類以外の色とする。その試合に出場するGKは同じ色のシャツもしくはベストを着なければならない。色はユニホームの大部分を占める基調色を色と呼ぶ。図でいえば、白と赤である。ユニホームに高さ20cm以上の背番号、高さ10cm以上の胸番号をつけなければならない。背中に名前を入れる場合は、高さ10cm以内とする。

代表者会議で承認されたユニホームの確認、承認は、第1試合は試合開始30分前、第2試合以降は、前の試合の前半終了直後に記録席前で行う。その試合に着用する全ての種類のユニホームを持参する。調整がつかない場合は、IHFルールと同様に、チーム番号の大きいチームが変更する。参考に、IHFのユニホーム広告に関する画像を示す。



5-6 短パンツの下に着用するサイクリングパンツの着用は許可される。しかし、短パンツと同色



でなければならない。または、チーム全員が同じ色のサイクリングパンツを着用するならば、短パンツと色が異なっても許可される。レフェリー、TDが随時チェックするが、責任はチーム責任者及び選手にある。走るとき、倒れるとき、たびたび規則に違反TD状態の時は、レフェリー、TDが注意するか、履き替えを指示する。

5-7 サポーターとして使用できるものは、各部位の医療用を目的として用いるものを許可し、リストバンド、エルボーサポーター、大腿部サポーター、ニーサポーター、下腿部サポーター、アングルサポーターをいう。上記サポーターは、ソックス、ハイソックスと同様、ユニホーム、短パンツと色違いであっても認める。写真のアンダーシャツ、アンダーパンツの着用は許可されない。



複数の部位を覆う写真のような用品はウェアとして扱われ、写真のようなアームサポーターの着用は認められない。また、サポーター等にメーカーロゴが大きく表記されているグッズの着用は認められない。IHFはシャツ、短パンツ、ソックス等のウェア



類のは 20cm² を超えないことと規定していることから、本協会もこの規則を適用する。

サポーターは、表面に金具が露出しているものの着用を認めない。

5-8 コートプレーヤーの単独で着用するロングアンダータイツは、認めない。ゴールキーパーがコートプレーヤーとしてプレーする場合（ゴールキーパーが交代し、さらにコートプレーヤーと同じユニホームを着用した場合）は除く。

5-9 同じチームのゴールキーパーのシャツの色は、同色でなければならない。ビブス（ベスト）を着用する場合は、登録された色（同色）でなければならない。その場合、登録された同じ番号でなければならない。登録されたゴールキーパーと同色の、穴あきのユニホーム（ビブス）を着用することは許される。ユニホームの色が同じであれば、形にはこだわらないということである。



5-11 背番号はユニホームにきちんとつけておかなければならない。背番号がとれそうな状態でのプレーは禁止する。ピンやテーピングで止めることは許されない。正されるまで競技に出場できない。

5-12 ピアス等は、イヤリングや突起のない指輪と同類のものとして位置づけられ、他の選手に危害を及ぼさないように、テーピング等で覆わなければならない。TD がレフェリーに助言・勧告をし、管理する。写真左はテーピングで覆っているので許可される。写真右はピアスを覆っていないので、ピアスを覆うまで出場は許可されない。



5-13 顔面マスクは、IHF ルールではいかなる素材であっても許可されない。また、IHF ルールとして、国内ルールであってもその使用を禁止している。フェースマスクは禁止し、ゴーグルタイプを使用するべきである。



正しい適用

許可されない

本協会、加盟団体の大会においては、その使用を認める。形状については、代表者会議の席上、申告を受け、大会競技委員長が許可する。その結果を受けて、TD が管理する。

5-14 屋内外で行われる競技会では、特に禁止されていない場合、指・手のひらに松ヤニを付けてプレーしてよい。松ヤニが許可されている大会、会場でも、競技会場以外で松ヤニが施設に付かないように注意させる。

5-15 靴に松ヤニをつけておくことは IHF では許可されている。使用が許可されている大会では、チームの責任において、コートから離れたとき、廊下、更衣室を含め、その他の施設に松ヤニがつかないように対応する。ただし、大会規定に明示して、松ヤニそのものの使用を禁止することや、靴に松ヤニをつけることを禁止することができる。

5-16 指以外の手の甲、手首に松ヤニをつけて（溜めて）おくことは禁止する。TD はついていた松ヤニがとれたことを確認して、出場を許可する。

5-17 トスは、試合開始前、記録席前で行う。第 1 試合のトスは、試合開始 30 分前（IHF

ルールでは 16 分前。)とし、第 2 試合以降は、前の試合の前半終了直後に行う。トスは、チームを代表する選手、もしくはチーム役員が行う。試合開始 30 分前、もしくはそれ以上の時間でトスが行われることから、スローオフ直前のサイドチェンジはない。トスは競技開始前にレフェリーが行うものであるが、TD は立会い、問題が生じたときには TD が助言・勧告する。

5-18 IHF が制定した公式記録用紙はあるが、国内の競技会ではランニングスコアを表記できる、最新の本協会公式記録用紙を用いる。PC を利用した記録様式、記録用紙も用意している。代表者会議で決定したチーム役員、選手のみが競技に参加、出場することができる。各試合の出場選手、参加チーム役員数は競技規則に定められた通りとするが、加盟団体が別に定めたときは、その規則に従う。

5-19 背番号は、国体以外は 1 から 99 までとする。国体での背番号は、1 から 12 とする。

5-20 試合開始前に負傷した選手が出た場合、試合開始 10 分前までは交代することができる (IHF ルールでも 10 分前までは交代できる。) こととした。ただし、大会エントリーとゲームエントリーが同数の大会の場合は、交代する選手が存在しないので、交代はできない。

5-21 スコアラーは提出されたメンバー表をもとに、公式記録用紙に転記する。TD は公式記録用紙に選手、チーム役員、その他の記入事項が正しく記入されたかを管理する。

5-22 試合開始 10 分前に、各チームの責任者が公式記録用紙に転記された選手、チーム役員の記入が正しいものであるかを確認し、確認の署名をする。TD は、チーム責任者が署名することを管理する。チーム役員が、A から D の区分で記入されているかを確認する。スコアラーが記載後、複数回のチェックがなされるが、それでも誤記載、誤記入はあり得る。最終的に、誤記載、記入漏れの責任は、確認を怠ったチーム責任者にある。

一方、誤記載、誤記入が判明した場合、適正な状況から再開する。原則として、特に罰則は適用しない。同様に、競技中、誤った判定、判断で競技が行われ、途中でその判定、判断が誤っていたことが判明した場合、その時点で適正な処置をし、競技を再開する。選手、チーム役員にその責任を負わせることはない。

上記は、正しく登録されている場合であって、正しく登録していない選手、チーム役員を出場、参加させた場合は別に罰則を適用する。

5-23 選手・チーム役員は、競技に参加、出場する場合は、登録証を提出しなければならない。各試合に登録証を提出しなければ、試合に参加、出場することはできない。登録証は最新の情報によって運用される。

5-24 本協会に登録が完了していれば、パソコンでデータを取り出すことは可能なことである。登録証の再発行は各チームの責任で行う。再発行業務を大会開催団体は行わない。

5-25 出場者リストおよび登録証は、各試合前に各チーム代表者がレフェリー、TD に提出する。第 1 試合の提出は、試合開始 30 分前 (IHF ルールでは 1 時間前) とし、第 2 試合以降は、前の試合の前半終了直後に提出する。

5-26 レフェリーと TD は、試合開始前までに、登録証によってチーム役員と選手の照合を行う。場内放送で選手紹介がある時は、その際に TD が照合する。

5-27 試合終了後、レフェリーもしくは TD は、両チーム代表者に登録証を返却する。裁

定委員会に提訴される選手、チーム役員がいる場合は、当該者の登録証はその場で返却せず、裁定委員会終了後、裁定委員会の処置に従い返却する。

5-28 試合に参加するチーム役員に、A から D の首から吊すカードを渡す。試合中、チーム役員に常に着用させておかなければならない。ハーフタイム中もつけておかなければならない。

5-29 カード A をチーム責任者とする。カード A をつけているチーム役員がいなければ、責任者として認められる行動はできないことを、TD からチームに伝えておかなければならない。国体は監督がカード A をつける。

5-30 選手とチーム役員が兼任の場合、罰則は個人に適用するものとする。コート上での罰則は選手に、交代地域でカードを着用しているときはチーム役員に記録する。ただし、選手で適用され、あるいはチーム役員で適用された場合であっても、個人として警告を2回適用することはできないことから、繰り返しの違反は2分間の退場となる。

5-31 国際試合の場合、通訳を置くことができる。通訳席はベンチの後方に置く。通訳をすることが主業務となる。通訳以外のものの立ち入りを、制限しなければならない。

5-32 チーム役員は、本協会に登録されていなければならない。しかし、国内の特殊事情で、トレーナーが派遣役員等で、登録締め切り日までに氏名を特定できないことがある。その場合は、交代地域の外側に臨時トレーナー席を用意し、選手が負傷した場合、交代地域外のその場所で応急手当をすることを認める。そのトレーナーは、交代地域やコート内に立ち入ることはできない。TD は、応急手当の際の管理をする。この臨時トレーナー席に立ち入ることの出来る該当者は、トレーナー等の公認資格を有していなければならない。この臨時トレーナーの待機場所、行動要領については、本協会主催のすべての大会において適用され、交代地域に入る等、一切の例外は認められない。

5-33 試合開始前に、交代地域規程に違反していないかを管理する。交代地域規程に違反していれば、その違反が正されるまで試合を開始させてはならない。正されなければ、レフェリーから罰則を適用させる。

5-34 チーム役員は、相手チームの選手（コートプレーヤー）とはっきり区別できる服でなければならない。5-5 で記したように、試合開始前のトスの段階で相手チームのコートプレーヤーのユニホームの色は判明することから、試合開始前、あるいは開始直後にチーム役員と相手チームのコートプレーヤーのユニホームの色が同じ場合、レフェリー、TD は、チーム役員に色の異なる上着の着用を指示する。正さなければ交代地域に留まることは許されない。イラストのような状態であれば、TD はチーム役員の服装の色を変えさせなければ交代地域にいさせてはならない。



5-35 コーチングゾーンはセンターラインから 3.5m（チームベンチの始端）から終端までとし、それより記録席に近づくのは下記の条件のみとする。

- 1) チームタイムアウトを請求するとき（チーム役員でなければならない）。グリーンカードを提出するときは、タイミングを計ることは許されない。
- 2) チーム責任者だけが TD を含み、記録席役員と話しをすることができる。

5-36 試合開始前に、レフェリー、記録席員との打ち合わせを綿密にしておく。

- 1) 計測の開始、停止の合図
- 2) 得点の合図
- 3) 罰則の合図
- 4) その他の事項

5-37 本協会が主催・共催する大会では、試合開始の挨拶時、TD を含めて記録席員、モップ係は起立し、挨拶をする。

5-38 放送席係員は、業務優先とし起立する必要はない。

5-39 コート脇に担架を用意する。コート内で軽傷程度だと担架に乗らない選手が多いことから、車いすを併せて用意し、状況に応じて対応する。担架は準備しているが、どのようにして使えるのかがわからないとか、誰が担当するかを決めていないことがある。事前の決定をするようにしておく。

5-40 試合前の挨拶は、コート中央にサイドラインと平行に横一列に並び、観客、ベンチに対して礼をして始める。全国大会では、選手の紹介を含めてベンチから、あるいはコート外から入場する方式を取り入れても良い。



6 試合開始後

6-1 競技時間は競技規則に従う。大会で定めた規則があれば、それに従う。競技時間は、加算式の電光表示板を使用する。電光表示板がない場合は、記録席の上にコート内から見える、卓上時計を用意する。卓上時計がない場合は、ストップウォッチを用いる。公式電光計時が機能しなくなったときは、可能な限り、用紙等による時間掲示をし、チーム関係者、観客に競技時間の経過がわかるよう配慮する。

6-2 レフェリーの試合開始の合図に合わせて、タイムキーパーが適切に時計を操作していることを管理する。時計を進めるとき、止めるときは、手を高く上げて確認の合図をする。

6-3 競技終了の合図は、ブザー、または笛で行う。音が適切に競技者、観客にわかるよう管理する。

6-4 試合途中のレフェリーの各種の合図を、記録席員が対応できるように管理する。レフェリーが得点の合図をした時、手を高く上げ、確認の合図をする。警告となるとき、レフェリーが選手に警告を与える。レフェリーがその選手を示し、記録席員が選手の番号を特定したときに、イエローカードを高く上げて合図する。番号がわからなければ、イエローカードは上げない。記録席員がイエローカードをあげなければ、



記録席では選手の番号がわからないことを意味しているので、レフェリーがさらに明確に、どの選手であるかを示す。退場、失格も上記の要領で対応する。退場の場合、再開の合図の際、タイムキーパーは退場を意味する 2 本指を用いて合図する。以上の点は、試合開始前に、レフェリーと打ち合わせをしておく。



6-5 試合中、交代地域にスペースがあれば、その地域内での短時間のウォーミングアップは許される。しかし、ボールを持ってのウォーミングアップは禁じられている。ベンチに座ってボールを持つこと、触ることも許されないため、試合開始後、試合が行われている間、後半開始時に、ボールが収納されていることを管理する。違反している場合には正さなければならない。ウォーミングアップを中断するようであれば、座るように指示をする。ウォーミングアップ中にコート内に向かって指示を出すようなとき、試合の判定に反応して大きな声もしくはジェスチャーをしたときは、座るよう指示をする。状況によってはスポーツマンシップに反する行為として、レフェリーを呼び、罰則を適用させる。



6-6 試合開始後遅れてきた選手、チーム役員は、TD、タイムキーパー、スコアラーが承認することにより、試合に出場、参加できる。承認されるためには、出場、参加資格があり、事前に提出されたメンバー表に記入された者でなければならない。



6-7 記録用紙に記載されていない選手や、参加資格のない選手が競技に出場した場合、当該選手及びチーム責任者に、レフェリーが罰則を適用する。TD が管理する。

6-8 試合途中、TD は交代地域に違反がないかを管理する。違反があれば、TD がレフェリーに知らせ、レフェリーが罰する。TD 以外の役員が違反に気がついたときは、次の中断の時にレフェリーに知らせ、レフェリーが罰する。



6-9 不正交代、不正入場その他交代地域の違反が確認されたとき、立ち上がり笛を 1 回吹きレフェリーに知らせる。不正交代の違反があったときは、アドバンテージルールを適用せず、直ちに競技を中断する。不正入場で選手が余計にコートに入った場合、複数である場合は常に最初に入った選手を退場とする。不正入場の際、罰則の適用する選手が特定できない場合、TD またはレフェリーは、チーム責任者に違反した選手を指名させる。チーム責任者が指名を拒否した場合、TD またはレフェリーは、コート上にいる選手から 1 名を指名する。ただし、7 人攻撃のような、交代のゴールキーパーがコート内にいる



時にはその交代のゴールキーパーを指名することはできない。

近年、交代地域内でのチーム役員、選手のスポーツマンシップに反する行為が目立つ。TDは、このような時は当該者のそばに行き注意を与える。注意を



したにもかかわらず是正されない時は、レフェリーに合図し、レフェリーから罰則を適用させる。最近のTDの任務の最重要課題である。

スポーツマンシップに反する行為には、判定に対する不満を表すジェスチャーをしたり、大声を出す、相手チームのみならず自チームの選手に悪態雑言を浴びせる、観客に対して不満の表現をしたり、大会・競技役員を含めて観客に不当な表現を用いたりすることを含む。TD自らが選手、チーム役員に罰則を直接与えることはできない。



笛の合図にあわせて、タイムキーパーが計時装置の時間を止める。この笛の合図は

TD、タイムキーパー、スコアラーも吹くことができる。記録席員は常に笛の合図にあわせて、時計を止める習慣を身につけていなければならない。笛の合図があったにもかかわらず、時計が止まらない場合は、直ちに時計を止めるよう、さらに大きな動作、行為をもって指示をする。時計を止めた状況及び再開方法について、レフェリーに適切に助言・勧告をする。

- 6-10 選手が水分補給やタオル使用のために交代エリアラインを通らず交代地域に戻ったとしても、罰則の適用はしない。水分補給できるのは、自分のチームの交代地域だけである。退場の判定の際、交代エリアラインを通らず、潔く交代地域に戻った場合は罰則を付加しない。右の写真のようにわずかにコート内に足を踏み入れているようなときは、不正入場としない。



交代地域違反があった場合、再開は相手チームのフリースローで再開する。



- 6-11 試合途中に、得点、罰則の数を管理する。記録席員は、得点した選手、罰則を受けた選手が誰であることを特定しなければならない。レフェリーと記録席員の連携がとれるよう管理する。
- 6-12 選手やチーム役員は、原則として自チームの交代地域に留まるものとする。しかし、チーム役員が交代地域を離れ別の場所へ移動したときは、チームを指揮し管理する権限を失う。その権限を再び得るためには、交代地域に戻らなければならない。



チーム役員は原則として座っていなければならない。ただし、原則としてチーム役員1名のみが戦術的な指示を出すことや、治療を目的としてコーチングゾーンの範囲内で動くことが許される。

- 6-13 試合中、許可した者を除き、いかなる者でも交代地域に出入りさせてはならない。
- 6-14 大会が認めたテレビ関係者は、チームタイムアウトの時間だけ交代地域の付近で、報道活動することができる。また、コート内から、ベンチの活動を撮影することが許される。その他の時間帯の報道活動は、交代地域内での取材活動は許されない。
- 6-15 チームタイムアウト請求カード（グリーンカード）は、チーム役員が、記録席の上に置かなければ請求を受理することはできない。記録席員は直接手で受け取らない。投げつけられ、記録席上からカードが滑り落ちるなどして記録席上に置かれてないときは、チームタイムア



ウトとしない。グリーンカードを提出するときは、タイミングを計ることは許されない。右の写真のように、コーチングゾーンを越えてグリーンカードを出さない状態の時は、受け取らない。



また、グリーンカードを出したり引っ込めたりするような状態の時は、スポーツマンシップに反する行為としてレフェリーを呼び、罰則を適用するよう指示する。



グリーンカードは、チームアウトを請求するときのみ持つことができる。原則として、ベンチに置いておかなければならない。

各チームは最高 3 回のチームタイムアウトの請求ができる。ただし、延長戦は含まれない。請求できるのは前半、後半それぞれ最高 2 回までである。それぞれの前後半で 2 回のチームタイムアウトを請求する場合、1 回目と 2 回目の間には、必ず相手チームがボールを所持する時間帯が必要となる。



グリーンカードは 3 枚準備する。それぞれのカードには 1、2、3 と番号をつけ、明確にしておく。前後半に最高 2 回までしか請求できないことから、前半には、1 と 2 の番号がついてあるカードを、配布する。前半 1 回も使用していないチームからは、1 のカードを回収する。また前半に 2 回使用したチームには、3 のカードのみを配布する。本来使用しなければならないカード番号でなくても、申請は認められる。チームタイムアウト終了後、正しいカード番号に戻す。試合の後半残り 5 分間は、1 回のチームタイムアウトしか請求できない。後半 25 分を経過し、2 枚のカードがある場合は、番号の大きいカードを回収し、1 枚だけ残す。チーム役員がカードを常に手に持っていてはこの回収ができない。カードをベンチに置いておかなければならない理由の一つである。TD 分が経過し、TD がカードの回収を完了していないとしても、25 分が経過してチームタイムアウトが請求されれば、その段階で残りのチームタイムアウトは請求できない。



6-16 チームタイムアウトが請求された際、1 分間の計時を管理をして、50 秒経過時の笛の合図を管理する。その間、必要であればレフェリーとスコアラは得点、罰則の確認をする。TD はレフェリー、スコアラ

一、もしくは、両者とともに確認する。

チームタイムアウトが記録席の上に置かれたら、直ちに笛を吹くとかブザーを鳴らすなどして合図をし、公式表示時計を止める。レフェリーがチームタイムアウトの合図をしたときから、1分間(50秒)の計測を開始する。同時に TD は、グリーンカードを持ち立ち上がり頭上に高く掲げ、もう一方の腕で請求した 交代地域を指し示す。



- 6-17 チームはパッシブプレーの合図が出たときに、チームタイムアウトを請求し、少しでもパッシブプレーの時間を引き延ばそうという手段をとることがある。TD はボール所持がどちらのチームであるかを確認しておき、適切に対応する。
- 6-18 試合時間の管理・決定はレフェリーの責務であるが、TD の職務として、タイムキーパーの管理と指導の責務がある。公示時計で表示していても、不測の事態に備え、別途に手元のストップウォッチで試合時間を計測しておかなければならない。
- 6-19 退場時間を管理する。退場となった選手を、ベンチに座らせるよう管理する。
- 6-20 退場者は、退場者電光表示板で表示する。表示が「0」になれば入場することができる。

退場者電光表示板を用意できない場合、各種トラブル等で退場者電光表示板が使用できないときは、用紙の両面に選手の背番号、入場許可時間を記入し、記録席上に掲示する。用紙を用いる場合、複数の選手が退場している場合は、明確に複数名退場していることがわかるように、IHF の写真のように 2 枚並べるとか、表示に工夫を するべきである。写真の IHF の用紙は、ラミネート加工をし、何度も書き変えられるホワイトボードマーカーペンを用いている。



退場時間が経過し、入場する際の判断は、チーム、選手の責任による。不適切な入場はさらなる罰則が適用される。記録席から入場許可の合図をすることはなく、また、入場許可を求められても回答しない。

- 6-21 チーム役員が退場となったとき、退場者電光表示板の番号表示は入力しない。記録席の上に紙で掲示するときは、A から D と表記し、選手の入場時間を掲示する。
- 6-22 失格となった選手を速やかに交代地域、競技場から退出させるよう管理する。競技場から退出させるとは、競技に影響のない場所に移動させるということである。
- 失格となったプレーヤー・チーム役員は直ちにコートや交代地域から去らなければならない。その後チームといかなる接触もしてはならない。競技の再開後に失格となったプレーヤー・チーム役員のさらなる違反を認めるときは、報告書を作成しなければならない。さらなる違反があっても、コート上のプレーヤーを減らすことはできない。失格となったプレーヤーがコート内に入った場合も、コート上のプレーヤーを減らすことはできない。

失格には、報告書を提出する失格と、報告書を提出しない失格がある。失格を適用したレフェリーは、報告書を提出するかしないかを TD にその都度申告する。申告がない場合は、TD がその旨を確認する。

6-23 大会でドーピング検査を実施する場合は、レッドカード席を設ける。その場合、失格の選手はコート外周に用意したレッドカード席に着席していなければならない。選手の管理はアンチ・ドーピング・コントロール班が行う。試合終了後、ドーピング検査の対象者となることがある。失格には「一発失格」及び「3 回目の退場」を含む。3 回目の退場者がドーピング検査が必要か否かは、アンチ・ドーピング・コントロール班の決定による。



6-24 試合中、コート内外を問わず各種トラブルが起きた場合、レフェリーと協力してトラブルを早期に解決できるように努力する。この行動、対処は速やかに、しかも迅速に行わなければならない。

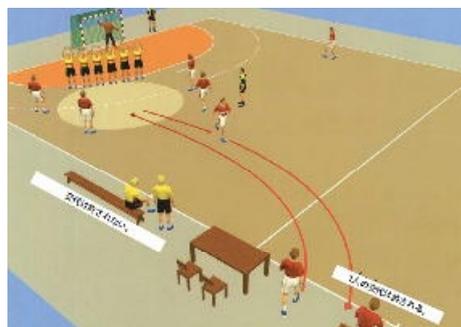
6-25 試合中、特異な状況で試合が中断した場合、TD が直接放送設備を使用して、観客に対して説明することが望ましい。TD が直接行動し、処理に時間がかかるときは、会場アナウンサーに説明させてもよい。

6-26 前半終了間際のプレイに注意を払う。特に、終了直前のシュートが得点となるかならないかの最終判断はレフェリーがするが、レフェリーに適切に助言・勧告をする。

6-27 前半終了、または、試合終了後でも、試合時間内の違反に対しては罰則を適用しなければならない。常にレフェリーの判定に注意を払い、競技規則に合わない場合は、助言・勧告する。

6-28 前半終了間際、あるいは、試合終了間際になると、次の試合の選手がコート近くに来て、各種の準備活動を始める。試合に影響がありそうなウォーミングアップ、ボールの使用は禁止する。

6-29 いわゆる「最後の一投」を行う際、負傷したあるいは負傷を訴えた GK 以外の防御側の選手の交代は、許されない。また、攻撃側の最後の一投をする選手は、直ちにその位置に着かななければならない。防御側選手の番号をメモすると、混乱の原因を減らせる。



6-30 試合中、出血して血がユニホームに付着し拭き取れない場合は、ユニホームを交換しなければなら

ない。その場合、番号は異なってもかまわない。競技中に外傷等が発生した場合、出血を認める場合はコート内に留まることは許されない。レフェリーが交代地域に行くことを指示する。レフェリーが出血等に気がつかないときは、TD がレフェリーに知らせる。止血の確認がなされた後、競技参加が可能となる。骨折、脱臼といった整形外科的外傷、脳震盪、心臓震盪、その他競技に出場することで選手の健康が明らかに阻害されると判断できる場合は、医師、専門家の判断を参考にして、チームの判断で出場可否を決定する。誰が見ても明らかに競技することが適切でないと判断される場合は、競技に参加することができない。

6-31 モップ係は、コート上の汗、水滴を拭くために業務をする。選手等が出血し、その血がコート上についたときは、感染予防のため、通常のコップ、雑巾で拭いてはなら

い。モップ係または専任係は、直接血に触れないように、ゴム手袋を着用しなければならない。一度使用したゴム手袋、雑巾はその都度廃棄のための袋に入れ、感染予防の処置をした後、医療用廃棄物として廃棄しなければならない。

6-32 試合中、ユニホームが破損し、競技を続行できないと判断されるときは、別のユニホームに着替えなければならない。その場合、番号は異なってもかまわない。

6-33 交代地域では、チーム役員、選手のあらゆる通信機器の使用を禁止する。通信機器ではないが、メガホンの使用を禁止する。

6-34 オウンゴール(以下 OG という。)の場合、OG となり得点したチームの得点欄に OG として記録する。個人の得点にはならないので、出場選手の記載のない欄に数字を得点として記録する。さらに、特記事項の欄に OG があったことを記載する。

6-35 選手が負傷して救護が必要な場合、レフェリーの指示に従って、救護するために選手、チーム役員を含めて関係者が2名コート内に入ることが許される。

試合再開をスムーズにするために、TD またはレフェリーの指示によって、交代する選手を予めコート内に入れることができる。この場合には、短時間、3 名になっていることがある。



6-36 特別な状況が発生した場合、例えば、観客がゴールに向かってボールを阻止し、本来得点となりそうな状況であると判断したら、得点を認める。また、たとえば速攻のような場合、両レフェリーが、違反の事実を見ることができないような状況になった場合、TD は得点後に、レフェリーに**失格相当**の違反の事実を知らせ、罰則を適用するよう指示する。



7 ハーフタイム

7-1 ハーフタイムを 15 分以内とし、大会で時間を定める。ハーフタイムのコートの使用は、国内では、原則として次の試合のチームの練習に使用する。

7-2 レフェリーとともに、審判控え室で競技全般に関する反省、後半に備えての準備をする。レフェリーに対しての指導は審判委員会の責務であるが、必要があれば審判委員会と共同してレフェリングの流れに影響の少ない範囲で助言・勧告を与える。前半のレフェリングの流れを変えるような助言・勧告は、厳に慎む。

7-3 ハーフタイム開始時にレフェリーと記録席員、TD が正しくハーフタイムの時間表示等がなされているかを確認する。

7-4 ハーフタイムの時間を管理する。TD、記録席員が席を離れる場合、後半が正確な時間に始められるよう管理する。

7-5 各チームは交代地域を交代する。交代地域のチーム名表示をしている場合は、正しく置き換えたかを管理する。

7-6 電光掲示板によるチーム表示は、基本的に前半後半で左右の表示を変えない。

7-7 ハーフタイム終了1分前に公示時計を止め、後半の試合時間を設定するよう管理する。

8 延長戦

8-1 延長戦の実施については、各大会で定める。正規の後半戦を終了した段階で同点で勝敗が決しない場合は、延長戦を行う。第1延長戦を行ってもなお同点で勝敗が決しない場合は、第2延長戦を行う。

8-2 レフェリーがトスを行う。

8-3 休憩時間を管理する。

8-4 交代地域の変更があれば管理する。

8-5 延長戦のハーフタイムは1分間である。休憩後に円滑に試合が始められるよう、審判員と協力して対応する。

9 7mスローコンテスト(7mTC)

9-1 延長戦を行い同点の場合は、7mTCにより勝敗を決する。7mTCは下記の要領で実施する。

9-2 全国大会は5名で行う。後半試合終了後、7mTCを行う選手のリストをレフェリーに提出する。大会によっては3名で行っても良い。また、大会日程により3名方式、5名方式を平行して採用しても良い。7mTCの登録・記録用紙を作成した。

9-3 両チームの選手、チーム役員は、使用するゴールの反対側のコートのセンターラインから4.5m離れた仮想ライン上に整列する。

9-4 先投、後投をコイントスで決定する。

9-5 両チームのスローする選手は、4.5mの整列ラインから交互にスローに行く。

9-6 交互に7mスローを行い、得点の多いチームが勝利する。なお、スローの結果が3対0、もしくは4対1などのように途中で勝敗が決まれば、その時点で7mTCを終了する。

9-7 7mスローが同点の場合は再度5名により7mTCを行う。2回目以後は1組目からサドネス方式とする。2回目は先投と後投を入れ替える。さらに同点の場合は、3回目の7mTCとして再度コイントスをして先投・後攻を決定する。以下、10人、15人が終了して同点の場合、11人目にコイントス、16人目に先投、後投の交代を同様に繰り返す。

守備についていないゴールキーパーは、交代地域と反対側の7mライン側方のサイドライン外に位置する。

9-8 7mTCを行う際、登録されてない選手、罰則を適用されている選手は、参加資格がない。5人制で実施する場合、状況によっては5人参加できない場合がある。その場合は、1人少なければ5回目のスローが失敗した記録にする。補充はできない。



10 試合終了後

10-1 公式記録用紙に記録された事項が、正しく記録されていること確認をする。確認は TD の記録と公式記録用紙を照合し、正しければレフェリーに確認の署名をさせるよう管理する。



10-2 すべての事項が記入され、TD が最終確認をした後、TD が署名する。

10-3 記録用紙は 1 枚目（白）を主催者用として大会本部に提出する。2 枚目（黄）を本協会提出用として大会本部に提出する。3 枚目（青）、4 枚目（青）は各チームに 1 部ずつ配布する。記録用紙が速やかにチームに配布できるよう、大会本部に提出できるように管理する。



10-4 TD 報告書の必要事項を記入し、競技委員長に提出する。特に、裁定委員会を開催する有無を、各レフェリー、競技委員長に確認して記録する。



10-5 その試合で特記事項があれば、TD 報告書に記入する。

10-6 選手、チーム役員を裁定委員会にかける必要がある場合、当該者の登録証は返還しない。



10-7 ドーピング検査に選定された選手、もしくはドーピング検査を実施する大会で、失格の選手が出た場合、登録証は返還せず、ドーピング班に渡す。

11 裁定委員会

11-1 各大会に裁定委員会を設置する。原則として委員は、競技委員長、競技副委員長、総務委員長、審判長とする。なお、必要に応じて選手、チーム役員、レフェリー、TD 等の関係者を同席させ、事情を聴取することがある。裁定しなければならない事案が生じた場合は、原則として当日に裁定をし、関係者に通知する。その結果は、翌日には各会場に公示する。

11-2 交代地域規程に違反する行為があった場合、あるいは、特別な出来事があった場合、TD は速やかに失格に関する報告書、兼裁定委員会開催要望書を作成し、競技委員会委員長（裁定委員会委員長）に提出しなければならない。

11-3 必要があれば、各試合担当 TD は裁定委員会に出席し、審議に加わる。

11-4 追放という罰則がなくなり「暴力行為」は「失格」+「報告書」。そして、さらなる「懲罰の付加」となる。一発失格の場合の裁定委員会は、報告書の提出の有無により開催する。

11-5 裁定委員会の審議対象者は平成 20 年度から、選手、チーム役員、レフェリー、大会関係者による重大な過失を伴う行為、処置も裁定委員会の審議の議案に含まれている。平成 26 年度高校選抜大会の事例では、競技委員長が TD 任務に従事していたことから、競技委員長（TD）及び同 TD の大会中の業務停止を裁定した。

12 突発的事項の対処方法

12-1 突発的事項が発生し、競技時間が終了していなかった場合、TD は試合を終了させなければならない。

12-2 IHF の規定では、混乱によって試合当日に試合が続行できないと判断された場合は、観客の有無にかかわらず、翌日（別の日）に同スコア、同じ残り時間、中断時の状況から開始しなければならないとしている。日本協会も、原則としてこの方法で対応する。

12-3 大会、各試合の続行に関して特別な判断が求められる場合は、大会委員長、競技委員長および日本協会代表者が協議し、決定する。

12-4 得点、罰則の記録ミスが試合中に判明した場合は、その時点から正しい状況で再開する。試合後終了後に記録ミスが判明した場合は、勝敗に関する場合は相応しい状況から再試合をしなければならない。

平成 26 年度の選抜大会のように、試合終了後であっても得点記録が不適切であり、修正した結果同点であった場合は、延長戦を行わなければならない。

試合中に退場しなければならない選手が何らかの理由によって退場せずに試合に出場し続けたことが判明した場合、その時点から退場を適用する。出場したことに対する責任はレフェリー、TD にあり、選手にそれ以上の罰則の適用はしない。事実が判明する間に

その選手が得点をあげた場合は、その間のすべての記録を認める。

12-5 大会危機管理として、冷静に行動できるよう、危機管理マニュアル通り運用が行われるよう管理する。

13 参考

13-1 試合開始までの時間は、各大会によって決める。選手、チーム役員、レフェリー、TD の紹介を放送するときは、上記の役割は全員紹介しなければならない。

IHF、AHF の試合開始までのスケジュール以下の通りである。

試合開始

40 分前	ウォーミングアップ開始
16 分前	コイントス
11 分前	ウォーミングアップ終了
10 分前	セレモニー開始
9 分 30 秒前	選手入場
8 分前	選手等紹介
4 分前	国歌演奏
0	試合開始

13-2 試合終了後はコート中央でサイドラインと平行に並び、ベンチ、観客がいれば反対側に挨拶をする。その後、すれ違いながら握手またはハイタッチをする。観客の有無を問わず、国内でも積極的に導入する。

以上